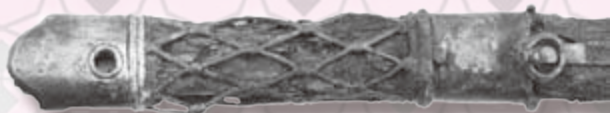




銀装圭頭大刀(全体) 武者塚古墳出土



銀装圭頭大刀(柄の部分の拡大)



武者塚古墳展示施設覆屋

武者塚古墳は、桜川北岸の上坂田地区の台地上にある7世紀中頃から後半にかけての古墳です。昭和58(1983)年に行なわれた発掘調査によって、「みすら」と呼ばれる古人特有の結われた頭髪が発見され、新聞の一面を飾るほど大きな話題となりました。

武者塚古墳最大の特徴は、古墳が造られてから発掘調査されるまで一度も石室が開けられた形跡がない、いわゆる未盗掘古墳であるということにあります。そのため石室内は、1300年以上の間、安定した環境が保たれ、副葬品も良好な状態で今日まで伝えられました。

副葬品には、5本の刀剣があります。このうちの1本は銀で装飾が施された、「圭頭大刀」と呼ばれる飾大刀でした。圭頭大刀とは、柄頭の上端がなだらかな山形になる大刀のことで、中国の玉器である圭を連想してこの名が付けられています。その柄頭は銀製で、柄は格子状の精巧な透かし彫りを施した銀製の金具で飾られています。鞘口にも銀製の環がついた金物が付けられ、鞘の先も銀の金具が付いています。特に優美な印象を与える斜格子透かしの柄はほかに類例がなく、ひときわ目を引きます。

当時の銀は、今以上に貴重な金属でした。銀が日本列島で産出されるようになったのは、記録のうえでは天武3(674)年で、対馬で見つかっています。おそらくそれ以前は大陸からもたらされていたものと推測されています。この頃、銀は飾大刀をはじめ各種の工芸品の加飾に用いたほか、少量ながら貨幣としても流通していました。径3センチメートルほどの銀の円板に銀片を貼り付けて重さ10グラ

銀で飾られた大刀

〜武者塚古墳出土の銀装圭頭大刀〜

ム前後としたもので、重さでその価値を決めていました。その後発行される和同開珎のような文字面がないことから、無文銀銭と呼ばれています。この無文銀銭は、全国に流通したのではなく、大和の藤原京や近江の大津京など、主に近畿地方でしか見つかっていません。このことは銀が希少であったことを示すとともに、銀の保有と流通がおよそ「畿内」と呼ばれる当時の政治の中心地域に限られていることを物語っています。

また、金属を加工する金工技術も、古墳時代、王宮が置かれた大和などがその中心でした。大和には高度な技術が大陸から持ち伝えられた渡来人が多く住み、そうした技術が結集されて日本で最初の寺院、飛鳥寺も造られました。

銀の保有と流通、そしてそれを加工する高度な金工技術も大和を中心に畿内に限られたことからすると、武者塚古墳で見つかった銀装圭頭大刀もそこで作られたと見るのが自然でしょう。おそらく王家か、あるいは有力豪族から下賜されたものと考えられます。武者塚古墳に葬られた人は、この大刀をもらうのにふさわしい、中央との関係をもつ地域の有力な人物であったと考えられます。

武者塚古墳は石室が現地に保存され、出土資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場で、展示替えをしながら公開しています。今回紹介した大刀は、12月末まで展示しています。ぜひご覧ください。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎ 826・7111